

猪苗代町木地小屋地区

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 積雪が多く春先等の栽培条件が不利な地域において、転作小麦の収量安定化を図り、規模拡大を実現する。
- 地域で合意形成を図り、作業の効率化に向けた団地化を推進する。



2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【作付面積】小麦(水田+畑地)：12.3ha(R3) → 27.7ha(R7)
- 山間地の農地を積極的に借り受け、自営のそば店で利用するそばや小麦を個人で作付している。
- そばとの二毛作としてH30から小麦を栽培している。



3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

<需要に応じた品質の高い小麦生産のため適期作業を徹底>

- 実需者を含む関係機関と品質や栽培方法を検討し、適期作業に努めている。
- 土壌分析を実施し、結果に対応した栽培管理を行うことにより、品質・収量の向上に努めている。



<機械導入による作業の省力化・効率化>

- 補助事業を活用し、農薬散布用ドローン、サブソイラ、ドリルシーダ、乾燥機等を導入しており、面積拡大への対応や作業の省力化・効率化を図っている。



4 取組成果

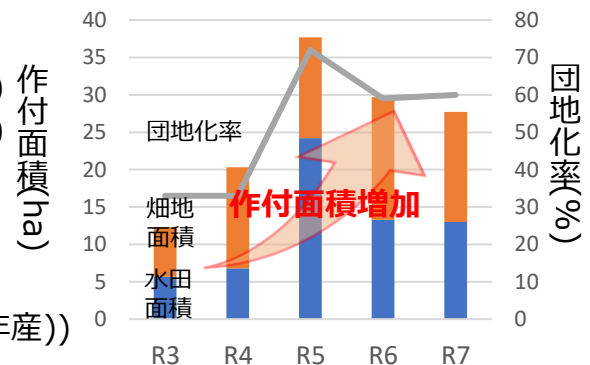
<小麦生産の面積拡大を実現>

- 周辺地区への作付を開始し、大幅に面積を拡大。
(面積：水田 5.7ha(R3年産) → 13.0ha(R7年産)
畑地 6.6ha(R3年産) → 14.7ha(R7年産))

<農地集約を実現>

- 周辺地区との合意形成により、団地化率が向上。
(2ha以上の団地化率：33%(R3年産)→ 59%(R7年産))

小麦の作付面積と団地化率の推移



5 残された課題

- 排水性が悪いほ場では単収が特に低いため、ほ場を選定して栽培を行い、単収向上を図る。
- そばとの二毛作で小麦を栽培しているため、適期作業が難しい。